
君の存在を僕に聞かせてくれないか？

白鳥準

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の存在を僕に聞かせてくれないか？

【Nコード】

N2849B

【作者名】

白鳥準

【あらすじ】

「私って、どうしてこんな風に生まれてきたんだろう・・・」僕の耳に突如入り込んできた言葉。学園のアイドルたる人間が口にした言葉に、僕は考えた。僕にとって存在理由とは何か、それを君に教えてあげるよ。灰田君シリーズ第三弾、「存在」編。始まります。

（前書き）

これは人の存在を定める文ではありません。
それを踏まえて読んでください。

「私って、どうしてこんな風に生まれてきたんだろう・・・」

僕こと、灰田純一はいたじゅんいちの学校には学園アイドルという人が存在する。

アイドルと言えば容姿端麗、成績優秀、運動神経抜群、人徳寛大とまあこんな感じだと僕は思っているのだが、まさにその通りな人だった。

廊下を歩けば、男子生徒は謎の不可抗力により振り返ってしまうらしいし、女子においても同様だとか。僕においてはそりゃアイドルと呼ばれるくらいだから可愛いとは思うけど、所詮はその程度の感情さ。

別に恋愛とかに興味がないわけじゃないけど、なんだかそういう時間って無駄なような気がしてならないんだよね。そう思ったら僕にとって女子に興味を持つことなんて不可能レベルの出来事さ。当然男子もね。

でも、そんな彼女と初めて話したきっかけがこんな言葉だったとは、今思えば不思議な話だと思うよ。

完璧という名の仮面のしたには、必ず弱さが潜んでいるんだって、僕は知ったんだ。

僕は昼休みのときは大体屋上で食べるっていう、ベタなことをしているんだけど、その日はなんだか不吉な予感がしていたんだ。なんていうか、第六感とは違うけど人間の気配ってのは絶対あるよね。そんなのを感じたんだ。

ついでに言うならば、昼休みが返上されそうな気配もビンビンに感じていた。僕の両手にある糧が、悲鳴を上げているように思えたよ。これ以上先に進まないでくれってね。

そんなこともお構い無しにドアを開けたら、高度がある場所特有の強風が一瞬だけ吹き荒れて、すぐに止んでしまった。なんていうか、この瞬間が楽しいと思う僕っておかしいのかもしれないね。

そして僕はいつもの場所へと足を運ぼうとしたのだけれど・・・。

「・・・・・・はあ」

どうやら先客がいるようだね。

今日は諦めて他の場所をとろうかなと思ったんだけど、その姿を見た瞬間僕の思考は瞬時にして変わってしまったんだ。

綺麗な長髪を風になびかせて、何故か悩んだように顔を曇らせている彼女の名前は、そのだかな園田華奈さん。彼女こそ、学園のアイドルと呼ばれる人物だ。

しかし先ほどのため息は聞き捨てならないな。完璧と呼ばれた彼女がため息とは似合わない。

「私って、どうしてこんな風に生まれてきたんだろう・・・」

悲しそうな目を伏せて、なんだか泣きそうになっている。

若き悩みゆえに、我ここに存在あり、かな。まさかアイドルが僕の特等席にいるなんて、普通じゃありえないからね。

これはなんだか放っておけないな。

「どうかしたの？」

ああ、声をかけてしまった。なんとも罪深い僕だ。

彼女は僕の声に気づいて、すぐに表情をいつもの完璧の仮面へと

変える。素晴らしいね、人間技とは思えない早さだよ。

「な、何かしら？・・・あの、聞いてた？」

「うん。ばっちりため息から」

「いたのなら声をかけてよ！・・・もう、最悪」

ずいぶんとご立腹の様だけど、実際僕がここに来たのはいつもの習慣であって、別にあなたの話が聞きたかったわけじゃないんだけどな。言い訳しても無駄そうだから言わないけど。

彼女は立ち上がって、僕の横を通って帰ろうとした。

しかし、その横顔を見た瞬間僕の思考回路と口は、同時に動き出した。

「君が何故そういう存在に生まれてきたのか、知りたいのかい？」

僕はその時微笑していた。

楽しかったわけじゃないよ。彼女の悩みは、恐ろしいものだを知っていたからだ。

「私が、どうしてこういう風に生まれてきたか分かるの？」

彼女は僕の少し後ろで立ち止まって答える。声が震えているようにも思えたけど、それは期待と不安が入り混じった特有の振るえさ。彼女は僕に問うた。自分自身の存在を。ならば僕は答えようじゃないか、君という存在を。

「君がそんな風に生まれてきたのは・・・偶然さ」

「何？あなた私を馬鹿にしてるの？」

「そんなことないよ。僕は君がこの現世にそういう風に生まれてきてしまった明確な理由を述べただけさ」

明確な理由、とまではいかなかったかもしれないね。でも、僕はそうとは思えない。

彼女がこのように、素晴らしい身をもって生まれてきたのは、前世からの決定事項でもなく、誰かが仕組んだ罠でもなく、突然の怪奇現象でもない。

言うならば、神様の気まぐれさ。

「偶然だと言ったら、私はなんのために悩んでいたのか分からない

いじゃない・・・」

へえ、なんのために悩んでいた、か。

ずいぶんと興味深いことを言ってくれと、僕は思うよ。

「何のために悩んでいたんだい？自分自身という存在の意味を見つけて、君に利得があるのかい？」

「利得って、そういうわけじゃないけど、なんだか知りたいたいと思ってね。神様って、人間を平等に作らないじゃない？それはどうしてだろうとか」

神様は平等に人間を作らない、か。

確かに僕らは、風貌も頭脳の出来も性格も地位も権力も様々だ。でもそれは、神様が決めることじゃない。僕ら人間が作り出した偶然と必然さ。

でも、この問題はそういうこと以前の問題があると、彼女に教えてあげたい。

「君が知ろうとしていることは、自己崩壊に繋がるよ？」

「自己、崩壊？」

彼女が僕に聞きなおすようにして、言った。

彼女は今まで悩み続けてきたというのに、何故そのことに気がつかなかったのか僕は疑問に思う。悩めば悩むほど、その問いの答えは遠ざかるということに何故気がつかなかったのか。

「そうだよ。何故こんな風になったのか。科学的に証明しようと思えば、親の遺伝子からその他もろもろ沢山あるだろうけど、それで君の問いの答えが見つかるとは僕は思わない。そうだろう？」

「う、うん・・・」

「だから君の問いは、偶然としか言いようが無く、そしてそれ以上を求めることは自己崩壊に繋がりがかねないと僕は思うんだ」

彼女は視線を地に移し、数秒考えたかと思うとやはり納得できなかったのか、僕に悲痛なものを感じさせる目で見て言った。

「でも、それじゃ私はダメなの。何か、理由が欲しいの・・・」

そうだね。偶然なんかの言葉じゃ納得できないのは分かってたさ。

ならば、僕の中で最も納得のいく答えを、君に与えてあげようと思う。

「自分自身というのは、自分以外の何ものでもなく、それ以上でも以下でもない。君が綺麗になったのは世界が君を美しいと認めたから、君が勉強が出来るのは君の努力の結果と才能、運動が出来るのは生まれ持った能力、それ以上の理由はいらないんじゃないかと思うよ」

黙り込んでいる。ダメージは相当大きいみたいだね。

この問いは、追求すべきものじゃない。その難しさは、黄泉の国を完全に理解すること並みに難題であり、それをノーヒントで解くものとなんら変わりはないと思うんだ。

青年期にはよく自分自身の存在に疑問を持つ人が多いみたいだが、それは蛇足な時間に終わるだろうね。そんなことに時間を使うくらいだったら、世界情勢や選挙活動とかに頭を使って欲しいものだよ、ホント。

「君という存在は、君自身でしかないし、君以外誰もいない。そのことに理由をつけようとするのは罪であり、罰が下る。永久の悩みとしてね。それを覚えておいて欲しいだけさ」

さて、彼女も彼女なりに答えを出しているのだろう。僕の意見は僕自身の個人論に過ぎない。彼女が持つ答えと僕の持つ答えは決して一致しないわけだから、最後には彼女に頑張ってもらっしかないしね。

「じゃあ、昼休みも終わっちゃうし、僕は帰るよ」

返事は返ってこない。なんだか、おせっかいだとは思っけど返事が無いと寂しいよね。

しかしなんだ、ああいう悩んでいる顔もまた可愛いなあ、なんて邪念は捨てないかね。縁の無い話さ。

僕は彼女からの返事が無いまま、屋上を後にしたんだ。

ああ、本当にご飯が食べれなかったよ。残念だ。

後日も彼女は廊下を多くの人に見惚れられながら、歩いていた。
今日もその姿は完璧という名の仮面を被って・・・いないようだ。
素の彼女が、そこにはいた。僕が見る限りであるけれど、笑顔も
振舞いも全てにおいて自然に見える。これが本当の彼女の魅力なん
だと、僕は気づいた。

仮面の残骸は欠片も残っていないのか、本当に輝いて見えたよ。
僕が彼女の横を何気なく通り過ぎようとしたその時、

「あなたは・・・」

肩に手を添えられた。

ああ、昨日の肩こりが一気に解消されていくよ。

「ええと、僕に何か用？」

「あなた、屋上で会った人よね？」

「うん。僕の目に間違いが無ければそうだね」

すると、彼女は目を伏せてから、何故か真っ赤な顔でこう言った。

「お願いがあるんだけど・・・」

これはすごい。

学園のアイドル様からのお願いだよ。聞き入れないわけにはい
かないね。

「何だい？」

彼女は、数秒を間を置いてから、僕に真っ直ぐな瞳を直撃させる

かのごとく向けて言った。

「付き合つて」

「・・・ん？お買い物かな。でも、僕つてば今日は晩御飯のおかずをお使いに頼まれてたんだ。非常に残念だけど、付き合えなさそうだな。」

あ、でも折角彼女に誘われたんだし、土日とか開いていれば付き合つてあげてもいいかもしれない。よし、そうしよう。

「えと、今日は用事があつて付き合えないんだ。土日とかなら大丈夫だけど、どうかな」

「ち、違って、その・・・」

何が違ふんだろうか。

ああそうか、お買い物じゃなくてクラス委員か何かのお仕事を手伝つて欲しいのかな？そうだとしたらとんだ勘違いをしてしまった。いや、ここは推測して話を進める前に、彼女に何を付き合つて欲しいのか聞くべきかな。

「何に付き合つて欲しいんだい？お買い物？仕事？」

「そ、そうじゃなくて、その、私・・・の・・・」

私の・・・。何だろう？僕になれとか？有り得ないか。

「彼氏に、なつて欲しいつて意味の、だよ」

うわぁ・・・。。青春時代の到来つて、誰しもやって来ちゃうんだね。

これだから人間の心情というのは到底理解しがたいんだ。何故一夜漬けでこんなことになつてしまうのやら。

でも僕、きつと今なら死ねるかもしれないね。

承諾してしまつたその日の僕は、もしかしたら自己崩壊を起こしていたかもしれない。

（後書き）

灰田君シリーズも第三弾となりました。

第一弾「君の死にたいわけを聞かせてくれないか？」

第二段「君の運命とやらを聞かせてくれないか？」

もよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2849b/>

君の存在を僕に聞かせてくれないか？

2010年10月8日15時14分発行